

参加団体・参加者	参加者発言内容	知事等発言内容	参加者の発言に対する県の考え方	担当課
CAPながの  矢島 宏美様 他5名	○CAPワークショップを通して見えた子どもの実態と課題  1 CAPの活動について ・就学前の子どもや小・中学生、保護者や教職員、児童養護施設職員などにCAPを実施して11年になる。全国に先駆けて県内の児童養護施設のほとんどで実施しており、施設で実施すると子どもたちがすごく変わってくる。 ・学校等に出向き、劇を見せたりしながら、子どもたちに人権（安心、自信、自由がキーワード）があることを繰り返し伝え、暴力から自分を守る力を、自分自身が持っていることに気づいてもらうようにしている。 ・子どものSOSをキャッチできる、子どもの話を聴ける大人を増やすことが大事だと考えている。 ・子どものワークショップを実施する前に、大人ワークショップを実施しているが、しんどい家庭ほど出てこれない。 ・心の効果はすぐに数値として表れにくい。また、CAPの活動だけではいじめはなくなるならない。  2 暴力の予防について ・1～2歳の子供のいる親を対象にワークショップを実施したところ、子どもとの関係や夫との関係など人間関係が思うようにとれないことが悩みを深くしていることが多い。暴力の予防、暴力の連鎖を断ち切るために、母子保健で就学前の子どもをもっている親にワークショップが必要だと感じた。 ・大人から暴力をふるわれたり、傷つけられるようなことを言われた子どもの多くが我慢をしたと答えている。また自分が悪いからやられたと思っている子どもも非常に多い。それがワークショップを実施すると、相談してもいいんだと気づく。CAPでは暴力を受けてもあなたが悪いわけじゃないと繰り返し伝える。  3 定時制の生徒への働きかけ ・定時制の生徒のクラスにもワークショップに入ったことがある。 ・中には発達障害の子もいる。2日間かけてワークショップを行ったが、2日目には、マスクをしていた子がはずしたり、目を合わせない子が目を合わせて答えてくれたりするようになり笑顔を見せるようになった。 ・自己肯定感が低く、自己表現やコミュニケーションが苦手な家族や友人との関係も希薄な生徒たちが多く感じた。 ・定時制に来るまでに家庭や学校でいつも叱られ時にはいじめられるような扱いを受け「自分が悪いんだ。」と自分を責めてしまう自尊感情の育ちにくい環境の中で育ってきた彼らに「自分の大切さ」「信頼できる大人が必ず近くにいること」や「人権感覚」を伝えることができほんとはよかった。	・CAPは具体的にどのような活動をしているのか。 ・横断的に大人の側が協力し合って子どもを支えていく仕組み作りが必要ではないか。  ・人間はみな価値観が違うのに、大人の社会でもみんなと同じにという感覚が強い。子どもたちはもっと自信を持っている。社会全体にそう思ってもらえることが大切。 ・教員、保護者などそれぞれが、子どもに良かれと思って一生懸命やっているが、自分のところからしか見ていない。それぞれが忙しい中で、CAPが、話をしてもいいというきっかけとなってほしい。	・児童施設等の職員を対象として、資質の向上を目的にCAPおとなワークショップを平成24年に実施する予定です。  ・23年度に長野県児童虐待・DV被害者支援連絡協議会における「児童虐待予防に関する分科会」を設置し、主に市町村における母子保健事業の強化及び充実について検討することとしています。23年度は3月16日に開催しました。  ・様々な教育活動を通して、発達段階に応じ、児童生徒一人ひとりがあらゆる人権問題を自らの課題として捉え、解決する意欲と実践力を身に付けられるよう、引き続き、継続的な人権教育に取り組んでまいります。 ・本年5月にCAPながの様からご講演を頂く機会もありますが、今後も協力関係を築きながら、共に人権教育の啓発推進に取り組んでまいりたいと考えています。	こども・家庭課   こども・家庭課   心の支援室